



教皇様の聲

6

218号

Libreria Editrice Vaticana, Città del Vaticanoの転載許可済 ©1998

教会の多様性は三位一体の反映

「サマリアは神のみことばを受け入れた。」(使徒行録8・14)

復活節の間、私たちは何度もあの高間に戻ります。そこはキリストの弟子と信者たちの共同体である教会の誕生した場所です。彼らは証人となって高間を後にし、まずエルサレムの街々で、さらに遠く離れた地域で教えを広めました。サマリアは十字架に架けられ復活したキリストの証人たちにほど近く、その道筋に位置していました。

ともあれ、まず高間です。この部屋でキリストは使徒たちに聖霊を約束されました。「私は父に願おう。そうすれば、父はほかの弁護者をあなたたちに与え、永遠にともにいさせてくださる。それは真理の霊である。」(ヨハネ14・16~17)

この告知はほどなく実現しました。五旬祭の日、使徒たちは聖霊を受け、キリストが宣言した真理の、すなわちキリストその人である真理の証人となりました。使徒たちはあらゆる所で真理を伝えました。まずエルサレムで、そしてユダヤとサマリアで、さらには世代を重ねて、地上のすみずみまで。「サマリアは神のみことばを受け入れた。」使徒行録はこの次第を述べています。最初の七人の助祭の一人だったフィリッポと、使徒ペトロとヨハネ自身の活躍によるものです。サマリアについての簡潔な記述を読むと、少しずつ福音が伝えられていった(今も伝えられている)他の場所や町々がすぐ念頭に浮かびます。(…)

病人、高齢者の皆さん、ここに来られなかった人たち、そしてテレビやラジオで参加している人々に、ご挨拶します。皆さんを通じて、家族の方々にもご挨拶します。家族を通じて若者のみなさん、そして若い人たちから始まって各年代の方々、中高年の皆さんにもご挨拶します。今日、ペトロの後継者である教皇を囲んで祈りのうちに集まった教区共同体の全ての人にご挨拶します。キリスト教の始まりの頃、サマリアの改宗者たちが使徒ペトロとヨハネを迎えたように、皆さんも私を温かく迎えてくださいました。

使徒行録を見ると、「エルサレムにいた使徒たちは、

サマリアが神のみことばを受け入れたと聞き、ペトロとヨハネを送った。彼らはサマリアに下り、人々が聖霊を受けるようにと祈った。」(8・14~15)使徒がすでに洗礼を受けていた改宗者たちに按手すると、彼らに「聖霊が下った」(8・17)のです。使徒ヨハネとペトロが教会共同体の中で、どのように事を処理していたのかを見ることができます。後にある偉大な教皇が、それを「神のしもべたちのしもべ」という言葉で言い表わしました。

このように使徒たちは、聖霊の力によってキリストの勇敢な使者となり、新受洗者に主の賜物を与えて、十字架に架けられ復活した方の証人となる力を受けさせました。「その体に死を受け、霊において生かされた」(1ペトロ3・18)キリストは、教会の使徒職を通じてサマリアの住民たちに「聖霊によって生きるように」と呼びかけ、聖霊の力で信仰を世に告げ知らせることができるようになると約束しておられます。使徒が手を置くと、聖霊が下り、光と力が注がれました。その時のペトロの説教は、堅信式の説教のようです。

使徒は書いています。「心の中で主キリストを聖なる者として扱い、希望の理由を尋ねる人には常に答える準備をせよ。」(1ペトロ3・15)キリスト信者は真理の証人・守護者であり、希望の推進者です。

「正しい良心を持つようにせよ。そうすればあなたたちがキリストにおいて行なうよい行ないをのしる人は、自分がののしったことを恥じるであろう。」(同3・16)信仰を告白するだけでは十分ではありません。誠実に信仰に生きることが必要なのです。これが使徒的なキリスト教生活です。

そう、首尾一貫した信仰生活が必要です。今日、皆さんも聖霊の力強い呼びかけを受けています。皆さんの直面する問題は、全ての信者と共同体全体にとっても、同じように切実な課題です。

目を開いて、全ての人の期待に気づいてください。必要とする多くのことに目を留めてください。人々は幸福や平和だけを求めているわけではありません。もっと深いもの、もっと価値あるものをも求めています。

親愛なる兄弟姉妹たち、私がここにいるのは、神の子イエズスが復活の力を帯びて私たちの間に生きておられることを皆さんと共に言い表わしたいからです。

キリストにおいて、真の魂の交わりが可能になります。いろいろな文化や物の考え方の違いは、ある意味で三位一体の神の一致を反映しています。キリストとのつながりにおいてのみ、友情、正義、連帯、自由、平和といった偉大な人間的価値が、その内容にふさわしいものとなって人の心を引きつけるのです。共通の信仰を誠実に生きることによって、人間の尊厳を守る連帯の行為が実現します。生命を喜び迎える態度に表われる生命への愛が、自然な生命の源である結婚への正しい評価をもたらします。生命を守り、育もうとするあらゆる努力を寛大に支え、真に他者に心を開く力を与えてくれることでしょうか。誰もが同じ人類家族の一員なのですから。

平和な社会をもたらすための手助けをしたいと願う人は、「私たちの平和」(エフェソ2・14)であるキリストに頼らねばなりません。福音を生活に受け入れるなら、福音は日々の選択を導く光となります。福音は正義のために働くよう人を促し、変化のめまぐるしいこの時代にあって、現代の共同体の必要に答える適切な機構を作りだすのに必要な決断とは何かを指し示してくれます。(…)

あらゆる手段を用いて死の文化に対抗し、生命の文化を広めましょう。神の言葉を受け入れ、永遠の救いの泉キリストの、熱心な弟子となってください。

祝された処女マリア、復活した主の御母よ、キリストと人類に忠実たらんと努める私たちの歩みに付き添

い、支えてください。どうかマリアの導きによって、主とのさらに親密で永続的な交わりを深めることができますように。

イエズスは再び言われます。「私が父におり、あなたたちが私におり、私があるにいます。」(ヨハネ14・20) 受難の前、高間で話された言葉です。さらに加えて、「私はあなたたちを孤児にはしておかない。ふたたび帰ってくる。もう少しすれば、世は私を見なくなる。しかしあなたたちは私を見るだろう。それは私が生き、あなたたちも生きるからである。」(同4・18~19) こう話されたのは死の前夜です。弟子たちに師の言葉の本当の意味がわかったのは、復活の後でした。「私が生き、あなたたちも生きるからである。」

キリストは私たちにどのような生命をもたらして下さったのでしょうか?キリスト自らお答えになります。「私のおきてを保ち、それを守る者こそ私を愛する者である。私を愛する者は父にも愛され、私もその人を愛して自分を現わす。」(同14・21)

新しい生命とは、神の愛にあずかることです。それは、神のおきてを忠実に守ることです。「私を愛する者は父にも愛され、私もその人を愛する。」

弁護者である聖霊の力で、私たちはキリストの真理の証人となります。聖土曜日からはまった復活節に、教会が私たちに願っているのは証人になることです。それは私の願いでもあります。言葉だけでなく心から、ここにいる全ての人とキリストの愛における私の兄弟姉妹たちをお願いします。アーメン。

(南イタリア・カンパーニャへの司牧旅行でのお話、92・5・23)

イザヤ預言の実現

聖母シリーズ 17

1 公会議は、旧約聖書に現われるマリアについて論じる際(教会憲章55番)、有名なイザヤ書の一節に言及しています。初期キリスト信者の特別な注目を集めた箇所です。「見よ、処女がみごもり、一人の子を生み、それをエンマヌエルと呼ぶだろう。」(イザヤ7・14) 「マリアは聖霊によってみごもっている」のだから、ためらわず妻マリアを迎えるようにと天使がヨゼフに告げる場面で、マテオはキリスト論とマリア論的な意味あいイザヤの預言に与えています。このように付け加えているのです。「これらのことは預言者によって主が言われたみことばの実現であった。『処女が身ごもって子を生む。その名はエンマヌエルと呼ばれる。』その名は(神はわれわれと共にまします)という意味である。」(マテオ1・22~23)

ヘブライ語テキストでは、エンマヌエルの処女から

の誕生は明示されていません。使われた語「アルマ」は単に「若い女性」を意味する語で、必ずしも処女のことではありません。ユダヤの伝統は永遠の処女性という考えを持っていませんでしたし、処女的母性という考え方を示したこともありませんでした。

主ご自身がしるしをお与えになる

しかしギリシャの伝承では、この語は「処女」を意味する「パルテノス」と訳されました。このことは単なる翻訳の特殊性のように思われるかもしれませんが、救い主の驚くべき誕生を理解できるように、聖霊がイザヤの言葉に与えた神秘的な意図を認めなければならぬでしょう。「処女」と訳されたのは、イザヤ書が御宿りの宣言を非常に厳かに準備し、それを神からのしるしとして提示し(イザヤ7・10~14)、驚くべき御宿り

【近刊】

神に「はい!」と答えた人の物語(福者ホセマリアの伝記)……ミゲル・アンヘル・カルセレス、イザベル・トーラ共著

福者ホセマリア・エスクリバーの生涯をそのエピソードでわかりやすく紹介。ジョルジュ・デル・ルンゴ絵。フルカラーの絵と文章は小・中学生にも読めるようになっています。吉津喜久子、村林祥子訳・監修

への期待を呼び起こしていることで説明がつきます。夫と結ばれた後、子を身ごもるのは若い女性にとって驚くべきことではありません。預言は夫については伝えていませんが、明確な記述が後にギリシャ語訳の中で示されました。

もとの文章では、イザヤ7・14の預言は信仰の足りないアハズ王への神の答えでした。王は近隣の王たちの侵略を恐れて、自分と王国の救いをアッシリアの保護下に求めたのでした。預言者イザヤはアハズ王に対し、神のみを信頼して恐ろしいアッシリアの介入を拒否するよう忠告し、主のために神の御力を信じて行動することを勧めました。「主なるあなたの神に、しるしを求めよ。」王は断りました。人間の助けの方を選んだからです。するとイザヤは有名な預言をします。「ダビドの家よ聞け、人の堪忍袋の緒を切らせるのは大事ではないか。今、お前たちは神の堪忍袋の緒を切らせようとしている。にも関わらず、主みずからしるしをお与えくださる。見よ、処女が身ごもり、一人の子を生み、それをエンマヌエルと呼ぶだろう。」(7・13～14)「私たちと共におられる神」エンマヌエルのしるしが告げられたのは、神が歴史の中におられるという約束の表われでした。それは、みことばの託身の秘義において実現しました。

2 エンマヌエルの驚くべき誕生を告げる中で、子を身ごもり、そして生む女性が示されました。それは母を子の運命に結び付けようとする意図によるものです。その子は理想の王国・「救い主」の御国を築く王子になるはずだからです。そこに女性の役割を強調する神の特別な計画をうかがうことができます。しるしは子だけではありません。後の誕生で明らかになる、通常ならぬ御宿りもしるしでした。それは母の中心的な役割を強調する希望に満ちた出来事でした。

エンマヌエルの預言を理解するには、サムエルの書下に見えるダビドへの約束によって開かれた展望をも通して見なければなりません。預言者ナタンは王の子孫への神の好意を約束しました。「その子孫は私の名のために家を建て、私は彼の王座を永久に堅いものにしよう。私はその者の父となり、その者は私の子となる。」(サムエル下7・13～14)

神はダビドの子孫に父の役割を果たすことを望まれました。その役割の完全な、真の意味は、新約で、神

の御子がダビドの家系において託身された時、明らかになります。(ローマ1・3参照)

3 イザヤの預言には有名な箇所がもう一つあり、エンマヌエルの誕生の並外れた本質を確認しています。それは次のとおりです。「私たちのために一人のみどり子が生まれ、子が与えられ、その肩には王のしるしがある。その名は巧妙な顧問、力ある神、永遠の父、平和の君となえられる。」(イザヤ9・5) 預言者はみどり子に与えられた一連の名のうちに、知恵、力、父の愛、平和の建設といった王としての務めを表わしました。ここでは母についての言及はありませんが、救い主の御国で人々が望み得る全てのものを与えてくれる子への賞賛は、子を身ごもり、そして生む女性にも反映されています。

有名なミカヤの預言もエンマヌエルの誕生を賛えます。「そして、エフラタの地ベトレヘムよ、おまえはユダの家族のうちで最も小さい者だが、イスラエルを治める者がお前から生まれねばならぬ。その出はずと以前、昔の日々にさかのぼる。それで、主は生む者が生む時まで、彼らを打ち捨てておかれる。」(5・1～2) 再び、救い主の希望に満ちた誕生への期待が響いています。ここでも母の役割が強調されています。喜びと救いをもたらす不思議な出来事を通して、母の役割が想起され、賛えられているのです。

預言は処女の母性を指し示す

4 マリアが処女でありながら母になるという事実は、謙遜な貧しい人々に示される神の愛によって、もっと一般的な方法で準備されていました。(教会憲章55番参照) 彼らは主に全幅の信頼を寄せることで、マリアの処女性の深い意味を予見したのです。人間としての母性の豊かさを放棄することで、マリアは人生の実りの全てを神に期待することができました。

旧約聖書は、処女の母性について明らかには述べていません。新約聖書ではじめて完全な啓示がなされたのです。しかし、イザヤの預言(7・14参照)はこの秘義を予告しており、旧約聖書のギリシャ語訳でもそのように解釈されています。マテオの福音書は、この訳による預言を引用することで、処女マリアがイエズスを身ごもったことを預言の完全な成就であると宣言したのです。(96・1・31)

聖霊降臨は最初の収穫祭だった

聖霊シリーズ 5

1 使徒信經の聖霊に関する部分を考察すると、聖霊論には聖書に根ざした豊かな基礎のあることがわかります。しかし同時に、神の啓示における場合と、キリスト論と関連して考えた場合とでは、異なる

見取り図が現われることに注意する必要があります。聖書で明らかな通り、御父と同質の永遠の御子は人間の歴史における神ご自身の啓示の完成です。「女から生まれた」「人の子」(ガラツィア4・4参照) となること

で、御子は真の人間として現われ、行動されました。同様に、御子は聖霊についても決定的に明かされました。聖霊が来ること、そして救いのみわざの中で、また三位一体という秘義において、聖霊は御父や御子とどういう関係にあるのかをお告げになったのです。イエズスの告知と約束によれば、キリストの肢体(1コリント12・27)であり、「世の終わりまで私たちと共にいる」(マテオ28・20参照)キリスト現存の秘跡とも称される教会は弁護者・聖霊の到来と共に誕生します。

しかし、御父や御子と一つである聖霊は「隠れた神」です。教会とこの世の中で働いておられるにも関わらず、目に見える姿で現われることもありません。人間の本性を取って私たちのようになられた御子とは違うのです。地上におられた間、弟子たちは生命のみことばである御子を目で見、「手で触れる」ことができませんでした。(ヨハネ1・1参照)

聖霊についての知識は、キリストの啓示に対する信仰に基づいており、神的ペルソナが人間の姿で私たちの間に住まわれたように目に見える形で納得させてくれるものではありません。聖霊が世にあって働いておられることから生じる結果を見て、知るのみです。この知識の鍵は、聖霊降臨という出来事にあります。

キリストがまかれた種の実りを収穫する

2 イスラエルの宗教的伝統では、聖霊降臨の日もともと最初の収穫を祝う祭りの日でした。「年に三度、男子はみな、イスラエルの神、主なる神の前に出なければならぬ。」(脱出34・23) 一番目は過越祭、二番目は収穫祭で、三番目は幕屋祭でした。

「収穫祭」は「働いて畑にまいたものの初穂を捧げる麦の刈り入れの祭り」(脱出23・16)で、過越祭から50日目に祝われたので、ギリシャ語では五旬祭と呼ばれました。過越祭から七週間目に当たるので七週の祭りとも言います。収穫祭は年の終わりにも別に祝われました。(脱出23・16、34・22参照) 律法の書には五旬祭の祝い方について細かい規定が記されていて(レビの書23・15以下、荒野の書28・26~31参照)、それは後に契約更改の祭りとなります。(歴代下15・10~13)

3 聖霊は使徒たちと、キリストの弟子たちの最初の共同体の上に降りました。その時彼らはエルサレムの高間で、イエズスの母マリアと共に「心一つにして祈りに専念して」(使徒行録1・14参照) いました。この出来事は、旧約の五旬祭の意味と関連しています。収穫の祭りが、聖霊の力による新たな「収穫」、すなわち聖霊の収穫の祝いとなったのです。

この収穫は、キリストがまかれた種の実りです。ヨハネ福音書のイエズスの言葉を思い出します。「私は言う。目を上げて見よ、もう畑は刈り入れを控えて白んでいる。」(ヨハネ4・35) イエズスはご自分の死後に

なって、弟子たちがイエズスのまかれた種の実りを刈り取ることをお教えになりました。「一人がまき他の者が刈り取る。私はあなたたちを送って、自分で労苦しなかったものを刈り入れさせた。他の人が労苦し、あなたたちはその労苦の実を受け継ぐのである。」(同4・37~38)

聖霊降臨の日以来、聖霊の働きによって使徒たちはキリストがまかれた種の刈り入れ人となりました。「刈る人は自分の報いを受け、永遠の命の実を集め、それによって、まく人は刈る人と共に喜び合う。」(ヨハネ4・36) 聖霊降臨の日、ペトロが最初の説教をすると「三千人くらい」(使徒行録2・41) もの人々が改心し、豊かな実りがありました。それは使徒たちにとっても神である種まき人すなわち使徒たちの師にとっても、大きな喜びでした。

4 収穫は、キリストのいけにえの成果です。イエズスはまく人の「労苦」について話しましたが、それは特に受難と十字架上の死を指しています。キリストは収穫のために骨折った「他の人」であり、真理の霊のために道を開いた方です。霊は聖霊降臨の日以来、使徒たちの宣教という形で効果的な働きを始めました。十字架上で自分を捧げたキリストは、槍で貫かれたわき腹が証明しているこの贖いの死によって道をお開きになりました。その心臓からは「すぐ血と水が流れ出た。」(ヨハネ19・34) 身体の死のしるしです。この事実、かつてイエズスが幕屋祭の最後の日に話された不思議な言葉の成就が見取れます。聖霊の到来に関することでした。「渇く者があれば私のもとに来て飲むがよい、私を信じる者は、聖書のことばにあるとおり、生きる水の川がその内から流れ出るだろう。」福音史家は「イエズスは自分を信じる人々が受けるはずの霊について話されたわけである」とコメントしています。(ヨハネ7・37~39) 幕屋祭では雨乞いの祈りが行なわれましたが、信じる者にはもっとそれ以上が与えられると言っているかのようです。預言者たちが告げた、シオンの生きる水があふれ出す泉から水を汲めるのですから。(ザカリア14・8、エゼキエル47・1参照)

5 イエズスは聖霊を約束されました。「私が去ればそれを送る。」(ヨハネ16・7) まことに、キリストの貫かれた脇腹から流れ出た水は(ヨハネ19・34) 聖霊を「送る」しるしです。それは豊かに注がれ、「生きる水の川」となります。自らを人間にお与えになる神の特別の寛大さと優しさを表わすとえです。

エルサレムの聖霊降臨は、イエズスが約束し、聖霊を通じてお与えになるこの豊かな神の恵みの確証です。

ルカの記述では、同じ祭りの機会は象徴的な意味を帯びています。聖霊が降りたのは祭りの最後の日でした。福音史家の用いた表現は完成を暗示しています。

「五旬祭の日が来て…」(使徒行録2・1) その一方でルカは「皆が一緒に集まっていた」ことを繰り返し述べています。使徒たちだけでなく初代教会の構成員全員、男も女もイエズスの母と共に集まっている光景がまず最初に思い浮かびますが、聖霊降臨の描写を見ていくと、それに劣らず重要な「満ち満ちる」という観点からの光景が目に入ります。

ルカは書いています。「突然、天から激しい風が吹いてくるような音が聞こえて、彼らの座っていた家に満ち…、彼らはみな聖霊に満たされた。」(使徒行録2・2、4) 満ちることが強調されています。「家に満ち」、「彼らはみな満たされた」これは、イエズスが御父のもとに行く時、言われたことと関連があります。「あなたたちは間もなく聖霊で洗礼を受けるだろう。」(使徒1・5)「洗礼を受ける」とは、聖霊に「ひたされる」ことです。これは洗礼で水に浸す式があることに表われています。「浸される」と「満たされる」ことは、聖霊降臨によって使徒たちと高間にいた全員に起こったのと同じ霊的現実を意味します。

6 聖霊降臨の日、小さな共同体の人々が体験した「満たされる」経験は、言わば「全ての満ち満ちる者」(コロサイ1・19)であるキリストの内に住む聖霊の満ちあふれの、霊的な延長と呼べるものです。回勅『聖霊・生命の与え主』にあるように、イエズスが「御父と、御子である自分自身について言われる全てのことは、彼の内にあって心を満たし、人格をひたし、その行動を奥底から支え、力づける聖霊の満ちあふれから発しています。」(21番) ですから福音はイエズ

が「聖霊によって喜びに身を震わせた」(ルカ10・21)と言っているのです。このように、キリストにおいて満ちあふれる聖霊は、五旬祭の日の高間に集まっていて聖霊に満たされた全員によって明らかになりました。こうしてキリスト教会は、使徒パウロが述べているような状態で始まりました。「あなたたちは権勢と能力のかしらであるキリストにおいて満たされた。」(コロサイ2・10)

付け加えて言うなら五旬祭の日、聖霊は使徒たちの「師となって」その力を人類に示したのです。この力の顕示には、霊・精神・意志と心の力として示されている霊的賜物という性格があります。実際、聖ヨハネは「神から遣わされた方は、神から限りなく霊を与えられている」(3・34)と書いています。この言葉はまずキリストを指していますが、キリストが霊をお送りになった使徒たちをも指しています。今度は彼らがキリストを他の人々に伝えるためです。

7 最後に、聖霊降臨の時、エゼキエルの預言が成就したことに触れておきましょう。「私はおまえたちに新しい心を与え、新しい魂をおく。」(36・26) この「息吹」は刈り人に喜びをもたらし、イザヤと共にこう言うことができるでしょう。「彼らはみ前で喜んだ、刈り入れの時のように。」(9・3)

昔、収穫祭であった聖霊降臨は、いま新しい意味を帯びてエルサレムの真ん中で起こりました。それは神的弁護者の特別な「収穫」です。こうしてヨエルの預言が成就します。「そののち、私はすべての肉の上に霊を注ぐ。」(3・1) (89・7・5)

聖ペトロ、聖パウロの殉教

うるわしいローマよ！ 本日の典礼は聖ペトロと聖パウロの殉教を記念しています。二人の死の記念を通して、私たちは生命を祝います。実際、死はただ生命の終わりではありません。時という期限、歴史という範囲内での生命の完成でもあります。人間の地上での存在全体に押された封印のようなものです。

このように、使徒ペトロとパウロの死は同時に彼らの生涯をも物語ります。二人の生涯は、ご自分につき従うよう彼らをお招きになったキリストとの関係において、実にきわだっています。キリストは、ガリラヤ湖の漁師であったヨナの子シモンに「岩」を意味するペトロという名を与えました。また、キリスト信者を迫害したタルソのサウロを国々の使徒、「選ばれた器」(使徒行録9・15)とされたのです。

こうして二人の生涯は、人をキリストの死と復活の証人に変える聖霊の力によって、並みはずれたものとなりました。「(聖霊が) 私について証明されるである

う。あなたたちも私を証明するだろう。」(ヨハネ15・26~27) 二人がネロの時代のローマで迎えた死は、彼らの最後の証言でした。こうして証明は完全なものとなりました。殉教の死によって、二人の生涯は教会の記憶の中で特別な位置を占めるものとなりました。二人は「死者の神ではなく生者の」(マテオ22・32)神、「全てを生かす」神と共にいます。

うるわしいローマよ！ 本日の典礼がローマについてこのように語るのは使徒たちの死のゆえです。ローマは祝われています。生命を証する死の舞台となったからです。ローマは「神の偉大なわざ」の舞台となりました。チェザルの都ローマに貧しいガリラヤの漁師シモン・ペトロが現われたのは歴史の主の見えない御手の導きによるものでした。やがて同じようにパウロが現われ、教会の花婿キリストをたゆまず述べ伝えます。

「ローマ」という字をさかさに読めば「アモール」(愛)になる、とはある詩人の言葉です。古き世界の都

ローマ。何世代ものキリスト教徒に残酷な仕打ちをし、最初の使徒たちをキリストの殉教者としたローマ。それでもローマという名には、どんな無慈悲や苛酷、迫害にも、死そのものにもまさる愛の真理が刻み付けられています。だからこそ、典礼は「うるわしいローマ！」と呼びかけているのです。今日、私たちは歴史

の主・教会の花婿がローマを立てられたことを喜びます。そして教会の聖なる使徒ペトロとパウロの墓をこぞって訪れ、「信仰がなくならぬように」(ルカ22・32)と祈ります。

いつでも常に回心を！そして回心と共に、兄弟たちを強めましょう。(6・29、ペトロ、パウロの祝日に。)

教皇さまの動き

● 5・13 聖ペトロ広場での一般謁見で「生命の与え主」聖霊についてのお話をされた。「聖霊とは何者で、何をするかを聖書は力強く語ります。全てこの世の善、真実、聖なるものは、聖霊の働きなしには説明が付きません。」「ヘブライ語では、風もしくは息吹を意味する言葉が霊を表わしています。不可思議な聖霊の性質には、二つの特徴が見られます。まず一つは、〈聖なる〉と称される霊の比類ない超越性です。神の霊はあらゆる点から見て神聖きわまりないのです。この神力がひとたび謙遜で開かれた靈魂に出会うと、その人から利己主義を取り除き、恐れから解放し、愛と真理と自由で世を満たしてくださいませ。」
「二つ目の特徴は、歴史に表われた力強い介入です。時には聖霊を目に見えない静的なものにとらえる考え方もありましたが、聖書に見える〈霊〉の概念は、抵抗できないほど活発で力強いものです。」

● 5月18日は教皇さまの78回目の誕生日でした。

1978年の登位以来、教皇ヨハネ・パウロ二世として知られるカロール・ヨセフ・ポイティワは、1920年5月18日、クラクフの近くの小さな町に生まれた。母と兄は早く亡くなり、父も1941年に世を去った。

9才で初聖体、17才で堅信を受け、高校卒業後の1938年、大学に入学すると同時に演劇学校にも入った。翌年、大学が閉鎖されたので、若いカロールは生活のため採石場と化学工場で働かねばならなかった。1942年、司祭職への召し出しに気づき、クラクフ大司教だったサピエハ枢機卿の神学校で学び始める。当時は演劇青年でもあった。

第二次世界大戦後、クラクフの大神学校と大学の神学部で勉学を続けた。1946年11月1日、司祭の叙階を受けた。その後すぐサピエハ枢機卿は彼をローマに送り、ドミニコ会のラグランジェ師の指導のもとで働くことになった。1948年、十字架の聖ヨハネの著作中の

信仰をテーマに論文を仕上げ、神学博士号を取得。この間、休暇を利用してフランスやベルギー、オランダのポーランド移民たちの間で司牧活動を行なう。

1948年、ポーランドに戻り、クラクフの各教区で司教代理と大学生の指導を1951年まで務め、再び哲学と神学の研究を始めた。その後クラクフ大神学校とルビン大学神学部で、倫理神学と社会倫理の教授となる。1958年7月4日、教皇ピオ12世は彼をクラクフの司教補佐に任命。同年9月28日、司教の叙階を受けた。1964年1月13日、教皇パウロ6世によってクラクフの大司教に任命される。1967年6月26日、同教皇によって枢機卿に信任された。第二バチカン公会議に加わり、「現代世界憲章」の作成に貢献する傍ら、ポイティワ枢機卿はあらゆる司教会議にも参加していた。

1978年10月16日、教皇職について以来、教皇ヨハネ・パウロ2世が行なったイタリア国外への司牧訪問は82回、国内での訪問は131回を数え、その総キロ数は1,111,002キロにのぼる。ローマ司教として270の小教区を訪問。主な著作は12の回勅、10の使徒的勸告、9の使徒憲章と34の使徒書簡を含む。教皇さまは107回の列福式を行ない、796名を福者と宣言。33回の列聖式を行なって、278名を列聖した。7回の教会会議を開催し、157名の枢機卿を任命。枢機卿総会も5回召集した。

1978年以来、教皇さまは12回のシノドス(司教会議)を開いている。著名な政治家との会見や謁見は900回以上(国家首席との公式会見40回を含む)に及ぶ。

昨年の5月から現在まで、教皇さまはポーランド、北イタリア(10日間の休暇として)、第12回世界若者の日のためパリへ、また全国聖体大会のためイタリアのボローニャへ、第2回世界家族会議のためブラジルへ、そしてキューバとニカラグアへ行かれた。5月23、24日はヴェルチェリとトゥリンを司牧訪問、6月にはオーストリアを訪問される。

「教皇様の聲」ヨハネ・パウロ二世教皇の説教、書簡、講話等を解説なしにそのまま伝える月刊紙

■毎月10日発行 ■定価：送料とも一部186円 ■年内定期購読：送料とも一部2,087円

詳しくは、精道教育促進協会までお問い合わせ下さい。

財団法人■精道教育促進協会 〒659 兵庫県芦屋市船戸町12-6 TEL.0797-31-3452・FAX.0797-31-3448